

ピーターラビットのことー1年生が培った心遣いー

清水保徳

本実践は平成5年度、東京学芸大学附属世田谷小学校におけるものである。

1 生活科が残したもの

ウサギ・チャボ・アヒル・ニワトリ・ハムスターなど、生活科の教科書に多くの生き物が登場した。これらの小動物たちは、

- (1) どこでも簡単に手にはいること
- (2) 誰にでも手軽に飼育できること
- (3) 生命活動が把握しやすいこと

などの理由から、日本全国の小学校で飼育されるようになった。その結果、繁殖力の強いものは飼育小屋から溢れ出すこととなった。1学期の終わりに1年2組にもらわれてきたウサギもそうした中の1頭(私はこのウサギと出会ってから、どうしても1羽と数えられなくなった)だった。

分かっているのは生後2ヶ月くらい、そしてたぶんメスということだけだった。しかし子どもたちは、中庭のウサギではない、自分たちだけのウサギがクラスにやって来たことに目を輝かせた。「ウサギは耳がいいから大きな声を出しちゃ死んじゃうよ。」

「おなか为空かないように草を採ってきてあげよう。」

子どもたちは言うより早く活動を始めた。はじめ手当たりしだいに採っていた草も、徐々にどのような草を好んで食べるかが分かってくる。子どもたちの目はいつの間にかウサギの目となり、ピーターが好んで食べるおいしそうな草を見つけられるようになっていった。

ラビットフードで育てる方法もある。しかし私は、できるだけ自然のもので、できるだけ子どもたちの手で育てさせたいと考えていた。そこには自然や生き物と共に歩むことによるのみ得られる、豊かな学びの世界が広がることを確信していたからだった。

2 同じ床の上の住人

この年が生誕百周年ということもあり、ウサギの名前は「ピーターラビット」と決まった。

この頃ピーターは、教室の中のゲージで飼われていた。これは子どもたちが、ピーターをどのように飼うか相談した結果であった。ある子はピーターに首輪をして飼うことを提案した。その方が広く動き回れるし、第一、家の近くで首輪をして



散歩しているウサギを見たこともあるという理由だった。それに対し、カゴに入れて飼った方がいいと主張する子たちは、首輪をしたら苦しいし、首に縄が巻き付いたら死んでしまうと反対した。結局、教室の中はカゴに入れ、お散歩するときは首輪をすることとなった。しかしピーターと子どもたちが慣れるに従って、ピーターが首輪をつけている姿を見ることは少なくなっていった。

そんなある日、カゴの中でちょこんと座るピーターを見て、

「ピーターをカゴから出してあげようよ。」

「ピーターは、もうすっかり仲良しだから絶対逃げたりしないよ。」

という声がしだいに大きくなり、ついには大合唱となって教室中に響いた。この日を境に、ピーターと子どもたちは、「同じ屋根の下の…」ではなく「同じ床の上の住人」となった。



みんなでピーターの家を作ろう

子どもたちはさっそく、窓際の一番見晴らしの良い場所に段ボール箱を重ねてピーターの家を作り始めた。子どもがまたぎ越せる程度の囲いだったが、ピーターも子どもたちもすっかりこの家が気に入ったようだった。

こうして1学期は、あっという間に過ぎ去っていった。

3 広がる活動

夏休みを超え、小さかったピーターもすっかり成長した。しかしここで困った問題が起こった。それは、教室の中に段ボール箱で作ったピーターの部屋から、ピーターが頻繁に逃げ出すようになってしまったことである。体の大きくなったピーターにとって、子どもたちの作った壁は、すでに飛び越えられないものではなくなっていた。

子どもたちは日頃の観察から、ピーターが1mの壁なら飛び越えないだろうという結論を出し、1m定規を使ってすぐに壁作りを始めた。それまで、子どもがまたぎ越せる程の高さだったものを、1mの高さにするのはなかなかの大仕事だった。下の方にはある程度丈夫な箱を置かないと、積み重ねていくうちに重さでつぶれてしまう。何度も失敗しながらも、子どもたちは自然に先の見通しをもって計画的に作っていくことを学んでいく。

子どもたちの活動は、部屋の囲いを高くすることだけにとどまらなかった。

「ピーターはきっと、お部屋が汚れているからいやになって逃げ出しちゃうんだよ。だからお掃除をしてあげよう。」

「遊び道具がほしいんじゃないかしら、遊園地を作ってあげよう。」

「みんながおうちに帰っちゃった後寂しいんじゃないかな。だからみんなのお顔を描いて、お部屋の周りに貼ってあげよう。」

ピーターに心を寄せた具体的なアイデアが次々出され、子どもたちの活動も広がっていった。

4 ピーターを助けて！

ある朝、職員室で打ち合わせをしていると、校庭の方から子どもたちの悲鳴が聞こえた。どうしたことかと窓を開けて見ると、いつのまにか校庭に入り込んだ野良犬がピーターを追いかけ回っているのだった。私もあわてて外に飛び出す。

子どもたちは、

「ピーターを助けて！」

「ピーターが食べられちゃう！」

と震え上がっている。

しかしピーターの中の野生は、東京育ちの年老いた野良犬など相手ではなかった。力強いジャン

プカと俊敏な動きで見る見る犬との距離を離すと、ピーターの家がある1年2組の教室に迷わず飛び込んだ。待ちかまえていた子どもたちがすかさずドアを閉め、無事難を逃れることができた。

「ピーター良かったね。」

「ピーター怖かったでしょ。」

と、子どもたちに抱かれるピーター。

「かわいそうに、こんなに震えてるよ。」

「心臓もこんなにドキドキしてるよ。」

「もう大丈夫だからね。大丈夫だからね。」

ほっとする子どもたち、ほっとするピーター。そして何より、ピーターがこの教室を我が家だと思ってくれていたことが嬉しかった。

こうして、ピーターと子どもたちの心のつながりはいっそう強いものになっていった。

野良犬はもちろん、その後すぐに用務主事さんに捕らえられ、構外に連れ出された。

5 「飼育」から「共生」へ

教室の中に区切られた壁はあるものの、ピーターは普段、教室の中を自由に歩き回っていた。なぜなら壁には、子どもたちが窓や出入り口をいくつもいくつも開けていたからだった。「ピーターを部屋に閉じこめておきたくない」、「いつでもピーターを見ていたい」という気持ちが、子どもたちにそうさせたのだろう。

授業中、机に向かって本を読む子の足下にちょこんと座るピーター。床に座り込んで工作をしている子の背中をツンツンとつつくピーター。ピーターはいつも子どもと共にあり、子どももまたいつもピーターと共にあった。

そんなピーターの姿と、テレビで見たニュースの1シーンをつなげて、良雄は次のような日記を綴った。

ぼくは、今日テレビを見ておもしろいけど、それは白鳥のおはなしでした。みんながゴミをすてるので、白鳥がくるしそうにして、かわいそうだとおもしろいので、川はよごさないようにしようとおもいました。だから、へやはよごすとピーターもしにそうになってしまうから気をつけよう。

さっそく子どもたちにこの日記を紹介したところ、ガムテープや画鋲はもちろん、「ピーターが食べたら大変」と、消しゴムや鉛筆などの落とし物も、教室から姿を消すこととなった。

自分たちと同じ床の上で暮らすピーターを思いやる気持ちは、他にも形となって現れる。「ピーターを踏んでは大変」と、机や椅子の脚をガタガ

夕掃することもなくなった。教室のドアを後ろ手でバタンと閉めることも、「ピーターが挟まったら大変」と、誰一人やらなくなった。美しい立ち居振る舞いは、元来、相手を思いやる美しい気配りの心から生まれてくるものなのだろう。

6 子どもたちに育ったもの

ピーターラビットを「核」とした活動の中で、子どもたちは多くのものを学んだ。cmやmなど、長さの単位は壁作りで体感していった。gやkgなど重さの単位は、ピーターが一日に食べる草を量ることで実感していった。学校や地域のどのあたりにピーターが好きな草があるか、地図づくりも行った。夏の時期は何の苦もなく手に入った草も、秋に向かうに従って採れる量が減ってくる。子どもたちは季節による植物の変化を肌身で感じる。このままではいけないと、子どもたちはピーターが食べる植物の栽培・観察を始める。ピーターをじっくり見ていた子が、ピーターがときどき自分の糞を食べていることに気付く。そこから食糞の習性のある動物について調べ学習が始まる。造形活動は言うに及ばず、調査、裁縫、コミュニケーションなど、子どもたちはピーターとの関わりの中で体験を通して必然的に学び、確かな学力として身に染み込ませていく。

きょう、ピーターについてしらべました。ピーターはあなほりうさぎだとおもっていたけど、ずかんで見ると、あなうさぎ、とかいてありました。えを見ると、やっぱりちやいろでした。ヨーロッパやアフリカで生まれたとかいてありました。

えさのところを見ると、はこべ・おおぼこ・にんじんとかいてありました。でもピーターは、はこべとにんじんとキュウリとキャベツとパンとタンポポがすきです。

これは麻子の日記である。図鑑で調べた内容を鵜呑みにするのではなく、自分自身が直接体験してきた事実と照らし吟味した結果、自分なりの見解を述べている。この子たちには情報を整理し、吟味する力まで育っていたのだ。そしてこれらの「学力」は、ピーターを思う深い愛情があったからこそ、より確かなものとして培われていったのである。

7 ピーターと私

教室内でウサギを飼うことは、決して楽なことではなかった。子どもたちは毎日、ピーターが気持ちよく過ごせるよう掃除に励んだ。しかし1年

生の子たちには限界があった。

私は毎週、休みの日のたびにピーターの家を解体し、デッキブラシで掃除をした。いくらアレルギーの子がいないからといって、ピーターの抜け毛を放ってはおけない。糞の始末は苦にならないが、尿の臭いは明らかにくさい。そのままにしておくと尿石のように白いものが教室の壁にこびり付いてしまう。半年後にはこの教室も次の学年に引き渡さなければならない。ピーターや子どもの健康を守るためにも、次にこの教室を使う子どもや先生のためにも、私は毎週汗だくになって、デッキブラシで床や壁をこすりにこすった。

しかし私は、子どもたちに内緒でピーターに会いに行くことを、どこかで楽しみにしていた。

朝、静まりかえった教室のドアを開けると、ピーターがヒョコヒョコと私の足下にやってくる。そして足のおいをおいをかぐと、私の囲りを嬉しそうにクルクルと飛び跳ねながら回り始める。最後に再び足下にやってくる。抱き上げてほしいとばかりすすねにしがみついてくる。私はピーターを膝に乗せ、あごの下や頭を撫でる。ピーターは気持ちよさそうに目を細める。わざわざ休みの日に学校に来るのは大変だが、そんなピーターが愛おしかった。掃除をしている私の横で、後ろ足を伸ばし、おなかをベッタリと床につけて寝ている(子どもたちはこの姿勢を「安心マーク」と命名した)ピーターを見ていると、明日への力がわいてくるようだった。

8 ピーターの異変

秋の風が吹き始めた頃、ピーターの様子はどうもおかしいことに気づいた。だるそうに横になっていることが多くなった。ウサギは8ヶ月ほどで大人の体になるらしい。「これはそろそろ生理が始まるのだな」と思った。それを裏付けるかのように尿の臭いも強くなったように感じられた。また、ときどき血の混じったような尿を壁にかけることもあった。



玉乗りをするピーター

ところが今度は、いきなりボールにしがみつき、誰に教えられたのでもなく玉乗りの練習をするようになった。ピーターは鼻先でボールを転がすと、それを追いかけては玉乗りをしようと飛びつく。そんな動作を何度となく繰り返した。ときには勢い余ってボールを乗り越え、反対側に頭から落ちてしまうこともあった。そんなピーターの姿を見て、私も子どもたちも「おもしろい遊びをするんだね」とケラケラ笑った。ところが数日後、笑ってられない事実が判明することとなる。

いつものように玉乗りに挑戦しているピーターをよく見ると、その股間に「ないべきもの」が確かに見えたのだ。メスだとばかり思っていたピーターは、実はオスだったのだ。

そういえば、ウサギは木の杭にも交尾しようとするという話を聞いたことがある。ボール乗りしようとするピーターは、実は交尾の練習(?)をしていたのだった。

子どもたちにはピーターはメスだと告げていた。しかし事実が分かった以上、いつまでも隠しているわけにはいかない。私は戸惑いながらもそのことを子どもたちに告げた。すると、

「そんなこと知ってたよ。」

と、子どもたちはすました顔でいる。

「えっ、知っていたの？」

と聞くと、

「だって、『ピーター』って、オスの名前でしょ。」

この名前をつけたとき、ピーターは全然いやな顔しなかったでしょ。」

と、返事が返ってきた。子どもたちに見事一本取られた。

後から分かったことだが、ウサギのような野生の生き物は、交尾の刺激で排卵するのだそうだ。まさに省エネの生き方をしているのである。



ピーコとの対面

9 出産、そして別れ

ピーターがオスだと分かると子どもたちは、「一人じゃかわいそう。お嫁さんをもらえないかな。」と騒ぎ出した。それから間もなく、教室にメスのウサギがやってきた。ピーターと仲良しになるように名前もピーコと決まった。

相性もあるので、始めピーコはゲージに入れたまま教室のピーターと出会わせた。ピーターはピーコを見ると興奮して、ゲージの周りをグルグル走り始めた。教室中の子どもたちが息をのんでその様子を見守る。

ピーターはピーコの周りを走りながらマーキングを始める。ピーコはじっとおとなしくしている。ピーターも静かにピーコに近づく。金網越しにピーターとピーコが顔を寄せ合う。

「仲良さそうだよ。」

「ピーコをオリから出してあげようよ。」

ゆっくりとゲージの扉を開ける。するとピーターは素早くその中に入り、ピーコと交尾を始める。



交尾するピーターとピーコ

「交尾してる！結婚したんだ！」

「おめでとうピーター。お嫁さんきてくれてよかったね。」

見守る子どもたちも興奮している。

「赤ちゃんが生まれるよ。お家をもっと大きくしなくちゃ。」

「それよりお掃除してもっときれいにしてあげよう。」

「えさもたくさん必要になるね。」

生まれてくる赤ちゃんを思い描き、子どもたちの活動もこれまで以上に力がこもる。

しかしそんな中、「ウサギは人間の前じゃ赤ちゃんを生まない。生んでもすぐ殺してしまう」という話を聞きつけてくる。

それに対し子どもたちは、

「ピーターとピーコはこんなに仲良しだから大丈夫



なかよしのふたり

夫だよ。」

「自分たちの大事な子どもを、絶対殺したりしないよ。」

と、この二人のことを信じ切っている。自分の子どもを平気で虐待したり殺したりする人間とは訳が違うんだと言わんばかりであった。

それでも、ピーターとピーコが段ボールの家の中に入ると、のぞき込んだり大きな音を立てたりしないようお互いに注意し合って生活した。

しかし赤ちゃんの生まれた気配を感じられないまま、3学期も終わりを迎えようとしていた。修了式を過ぎれば、この教室も次に入学してくる1年生に引き渡さなければならない。当然、ピーターとピーコの家も壊さなければならない。気持ちばかりが焦った。

そしてそのままついに修了式の日を迎えた。ところがまさに1年2組最後のその日に、待ちに待った赤ちゃんウサギが6頭、段ボールの家の中から顔をのぞかせたのだった。

「やったあ！赤ちゃんだ！」



早く赤ちゃん生まれなかな...

子どもたちはピーターピーコの家の周りにすずなりになる。

「かわいい！赤ちゃん産まれたんだね！」と抱き合っただけの子たちもいる。そんな中、「大きな声を出したらびっくりしちゃうよ、小さな声で！」

という冷静な声が響く。ハッと口を押さえ、それでもニコニコ顔を見合わせて、

「やったあ、赤ちゃんが産まれたよ。」

「よかったねピーター、おめでとうピーコ。」

と、ささやき合う。

しかしこの日がピーター、ピーコ、そして産まれたばかりの赤ちゃんウサギとのお別れの日になることを子どもたちはまだ知らない。

私はこの3月で附属世田谷小学校を去り、4月から附属竹早小学校に異動することが決まっていたのだ。

10 ピーターその後

1年2組は解体せずそのまま2年生に上がることになった。しかし4月からの2年2組のことは、新担任に全てをゆだねるしかない。何回か新担任と話し合いをもったが、「自分にはウサギは飼えない、ウサギが核でない、私なりの学級づくりがしたい。」ということだった。私も、子どもを増やすだけ増やして、後は新担任に押しつけて出て行くことはためらわれた。確かに、始業式に事実を知る子どもたちは、大いに嘆き悲しむことだろう。清水先生は帰ってこなくてもいいから、ウサギたちを返してほしいと泣き叫ぶことだろう。

しかしまた、命あるものはどのような形にせよいずれ別れのときを迎える。残酷に思えるこの別れも、長い目で見ればこの子たちの肥やしになることだろう。私は自分にそう言い聞かせて附属世田谷小学校を去った。

飼育ではなく、共同生活者としてピーターと共に過ごしたこの1年は、子どもにとっても私にとってもかけがえのない1年だった。

その後ピーター一家は我が家で余生を過ごすこととなる。私の家は千葉県の郊外にあり、タヌキやイタチを見かけることも珍しくない。夏はホタルが舞い飛ぶ豊かな自然が残されている。赤ちゃんウサギは近所の知り合いに引き取られ、ピーコは7年後、ピーターは8年後に息を引き取る。

(東京学芸大学附属竹早小学校教諭)